

国内避難民の受け入れと社会統合：少数民族児童を事例として

総合生存学館 博士課程（5年一貫制） 2年

渡辺 彩加

ミャンマー

2019年8月28日～2019年9月24日

計画の概要

ミャンマー連邦共和国（以下ミャンマー）は、世界でも最も長く紛争が続いている国の一つであると言われている(クレマー, 2012)。1948年に英国から独立したが、直後にビルマ共産党、また、少数民族組織が武装闘争を開始した。政府は2011年から全土停戦合意文書の締結を試みているが、16少数民族武装集団中10集団としか合意を結ばず、未だ内戦が続いている(Ganesan, 2015; 外務省, 2018)。北部のカチン州及び、シャン州では紛争のため、10万人以上の国内避難民が国連提供のキャンプ地に避難している(UNOCHA, 2018)。しかし、国内避難民の中には、国連提供のキャンプ地に避難しておらず、国連の統計に含まれていない人たちが存在することが2019年3月の現地調査により明らかになった。ミャンマーの寺院は、以前から貧困地域の児童へ教育機会の提供、孤児を受け入れ及び生活の面倒をみる役割を担っていた(藏本, 2015)。近年、その役割が都市部以外にも拡大してきている。

本研究では、上座部仏教のネットワークを通じて、安定地域の寺院に避難をしている少数民族出身の児童について調査した。

本研究の目的は、1. 他の都市から移動してきた少数民族児童の受け入れをしている寺院の実態を明らかにすること、2. それらの児童が社会統合していくにあたり、障壁および必要な要素を明らかにすることである。

それらの目的を達成するために、以下のことを行なった。

1. マンダレーにある国内避難民を受け入れている寺院のスタッフ、現在寺院内で生活している児童に対するインタビュー調査
2. 寺院において参与観察
3. 国連が行なっているプロジェクトに関するデータ収集

成果

1-1. 寺院の実態

今回の調査では、ピーで1つの寺院、マンダレーで4つの寺院を訪問し、住職や比丘、スタッフ及び教師にインタビューを実施した。S寺院に1日、SH寺院に4日間、O寺院には

3日間、P寺院には5日間、U寺院には1日の日程で調査を行なった。それぞれの寺院の住職にまずインタビューを行い、その後スタッフや教師にインタビューを行なった。S寺院では3人、SH寺院では7人、O寺院では7人、P寺院では13人にインタビューを実施した。

昔から伝統的に児童を受け入れているわけではなく、何かのきっかけで児童を受け入れるようになった寺院ばかりであった。例えば、SH寺院では、以前は瞑想のみを行い、児童を受け入れていなかったが、2013年にシャン州の寺院の比丘から「子どもを助けてほしい」とお願いされ、児童を受け入れることになった。一方、P寺院は、寺院に20歳以下の沙弥(Novice)がいなかったため、シャン州にまで募集をしにいった経緯がある。その後、P寺院の噂がシャン州の村の中で広まり、児童数が増えていった。S寺院では、住職が寺院の近辺の貧しい子どもたちに勉強を教えたことから発展し、2011年から学校となった。最初は近辺の貧しい子どもだけであったが、次第にチンやバゴーからの生徒も増えていき、今では寺院に寝泊まりして学んでいる生徒も多い。U寺院は寺院の近くの7つの村からの生徒と、シャン州からの生徒が来ている。7つの村のうちの1つはイスラム教を信仰している村である。教室の中では、ムスリムの生徒、沙弥、沙弥尼、他の村の生徒、シャンからした少数民族の生徒と一緒に勉強をしている。O寺院に関しては、住職が犬に噛まれて治療中のため、詳しい寺院の歴史を伺うことができなかった。

5つの寺院、共通して抱えている問題として、運営費、特に教師たちの給料をどのように捻出するのかという問題があった。しかし、それぞれの寺院で資金源と大きく異なっていた。SH寺院では、主に地域の人からの寄付で運営費を賄っている。それとは別に、日本のロータリークラブ、日本のNGOからのサポートを不定期に受けているが、そのほとんどは建物代や水タンクなどの物資である。一方、P寺院では教師の給料の30%~50%は政府からのサポートで賄っている。その他、オーストラリアのNGOから定期的な寄付、World Bankからの定期的なサポートが存在する。O寺院では、比丘が月に7回ほど説法をし、資金を集める他、地域の人からの喜捨で賄っている。以前はノルウェーからの寄付が定期的であり、年に一度ノルウェーの人たちが訪れていたが、NGOのリーダーの方が亡くなったことから、支援がなくなった。U寺院では、政府からのサポート、地域の人からの喜捨の他に台湾とタイから寄付をもらっている。SH寺院では94人の生徒、P寺院では8000人を超える生徒がいることから、必要な経費が異なるが、どちらも運営費の問題を抱えていた。

SH寺院では、言語の違いから、生活また教育の難しさを抱えていた。また民族が異なることを児童自身認識しており、教師や比丘に反抗することもある。授業中であっても、児童同士は少数民族の言葉で話し合っているため、教師たちが注意をできないということもあった。また、勉強に対して熱意がなく、宿題を出しても宿題をやってこない生徒がほとんどのため、毎日の授業が大変であるという問題を抱えていた。

1-2. 児童へのインタビュー結果

3つの寺院にて、児童へのインタビューを実施した。S寺院では5人、SH寺院では10人、O寺院では9人、P寺院では9人の児童にインタビューを行なった。なぜ別の地域の寺院に来たのかを話したくない、もしくは他の生徒に知られたくないという児童もいるため、基本的に、住職さんが指名した児童に対してインタビューを行なった。しかし、児童が自分から話してくれる場合には、そのまま話を聞く形でインタビューを実施した。

「なぜここ(別の都市の寺院)に来たのか?」という質問に対しては、ほとんどの生徒が、「教育を受けるため」と回答した。児童の出身の村には小学校までしかないため、中学校以上の教育を受けたいのであれば、別の村や都市に行かなければならない。両親や家族がその寺院に行くことを決めたケースが多かった。中には自分で行くことを決めた生徒もいるが、自分で行くことを決めた生徒はすでに兄弟や友達がその寺院に行っている場合がほとんどだった。

一方で、家族構成や家族の仕事の話を知ると、紛争と深く関係があることが明らかになった。P寺院のある男子生徒の両親はシャン州で茶の農家だったが、紛争の影響で農業ができず、今は経済的に厳しい状況である。また別の生徒の兄は少数民族武装集団に入り、去年亡くなった。兄が武装集団に入った理由には、一家から一人、男子は少数民族武装集団に入らなければいけないこと、また比丘は武装集団には入れないこと、などがあつた。P寺院に来ているある男子生徒は、沙弥として生活をしている。そのため、出家をせず、また村に残っていた男子生徒の兄が武装集団に入るようになった。

「将来の夢はなんですか?」と聞くと、P寺院の児童は、海外留学に行きたいと回答した子が2人いた。これは、P寺院が海外留学を奨励し、また英語の教師として英国や米国からボランティアの教師を受け入れていることが影響していると考えられる。その他には、教師になりたい、自分の村で比丘になりたい、マンダレーでツアーガイドになりたいなどがあつた。SH寺院の子は一人警察官になりたい子を除き、エンジニアや医師、教師が多かった。エンジニアや医師はミャンマーの中では有名な職業であり、尊敬を集める職業である。O寺院では、教師になりたい子が多かった。O寺院では授業の方法の改革をしており、生徒が教師を怖がらない教育を実践していることが大きな影響を与えていると考えられる。

2. 参与観察

SH寺院とP寺院では宿泊し、参与観察を実施した。O寺院には生徒と同じ時間に通い、参与観察を実施した。

大きな違いとしてあげられるのは、生徒の態度の違いであった。SH寺院では、勉強に意欲がなく、授業をさぼったり、授業中に居眠りをしている子もいた。外国人である私が教室にいても、特に興味はなさそうであり、挨拶すら話しかけられることはなかった。一方で、O寺院では、私の姿を見た途端に生徒が走り寄ってきて、英語で質問をされた。今彼らが習っている“What is your favorite ~”という文法を使い、休憩時間など暇があれば3年生か

ら 7 年生までの生徒が走り寄ってきて話しかけてくれた。P 寺院では常に外国からのボランティアの教師がいることもあり、生徒たちも外国人に対する抵抗はなかった。英語のカリキュラムが充実しており、英語が高いレベルで話せる生徒が多かった。児童に対して英語でインタビューを実施できたのは P 寺院だけである。

3. 国際機関が行なっているプロジェクト

国際労働機関（ILO）ミャンマー事務所に訪問し、子ども兵及び、強制労働に関するプロジェクトのお話を伺った。また、社会統合に関するご意見を伺うこともできた。民族によって、ID が異なり、都市での就職が困難な状況、また紛争が未だ続いている状況もあることから、現在ミャンマーでの社会統合を目指すのは困難であるというご意見をいただいた。強制労働者になってしまうプロセスや、子ども兵になるプロセスを伺うこともできた。ILO では、現在計画段階である子ども兵になった時点で 18 歳以下だった人の解放を進めるプロジェクトに関するお話を伺うこともできた。

JICA ヤンゴン事務所では、JICA が行なった教育支援のお話を伺った。今までは暗記型の教育がほとんどであったが、暗記だけではなく、自分で考えることに重きを置いた児童中心型の教育になった。その内容は、グループワークや、ミニクイズ、自分で文章を作る等である。児童が授業中に積極的に発言をしたり、教師を怖がらなくなったりするなどの好影響が結果として現れた。

4. 謝辞

今回の調査では、マンダレー大学および、ヤダナボン大学の人類学の教師にご協力をいただいた。インタビューに同行していただいたり、文字起こし、分析を一緒に行っていただいた。心よりお礼申し上げます。

今回の調査でご協力くださった方々

マンダレー大学 人類学

- ・ Thidar Htwe Win 教授
- ・ Zin Thu 講師 (associate lecturer)

Yadarnabon 大学 人類学

- ・ Zin Mar 教授

ILO ミャンマー事務所

- ・ Ms. Piyamal Pichaiwongse
- ・ Mr. Selim Benaissa

JICA ヤンゴン事務所

・岩沢久美子 様

S 寺院、SH 寺院、O 寺院、P 寺院、U 寺院

それぞれの住職様、担当者様、スタッフの皆さん、教師方、生徒のみなさん



写真1. SH寺院の住職、ヤダナボン大学のZin Mar教授と



写真2. SH寺院で5年生の授業の様子



写真3. SH寺院にて3年生の授業の様子



写真4. SH寺院にて日課の18時のおまいの様子



写真5 SH寺院にて料理をする Nunである女子生徒の様子



写真6 SH寺院にて、おまいりに向かう児童たち



写真7 SH寺院にて、授業をさぼって山登りをしている
男児生徒